



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「資本」と「労働」に関するチェルヌィシェフスキーの所論
Author(s)	山本, 敏; Yamamoto, Satoshi
Citation	スラヴ研究, 1, 9-24
Issue Date	1957
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4924
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112865.pdf



「資本」と「労働」に関する

チエルヌイシェフスキーの所論

山 本 敏

「資本」に対するチエルヌイシェフスキーの分析は、同時に「労働」に対するものと切離し難く結びついており、且つそれはかれの「資本主義」批判であり、「ブルジョア経済学」批判でもある。そしてそれらは何れも、かれの「革命的民主主義」及び「空想的社会主義」を構成する大きな要素でもある。

チエルヌイシェフスキーの経済観を論じようとするとき、かれの所論を「資本主義批判」、「ブルジョア経済学批判」、「社会主義的生産論——勤労者の経済学」及び「農業問題論」に分けて考察するのが通例となっている様である¹⁾。もちろん、かれの経済観をその政治観と厳密に区分出来るものではないし、革命的民主主義との関係も不可分のものである²⁾。ここでそれらの全部に渉ることは、而もそれをかれの全著作の中からひき出そうとするのは不可能なので、レウエリとザミヤトエンの方法³⁾にしたがって、「資本」と「労働」についてのかれの叙述の中から、「資本主義批判」と「ブルジョア経済学批判」にふれてみることにした。

チエルヌイシェフスキーの経済学に関する著作を代表するものは、言うまでもなく、「ミルの“経済学原理” 翻訳と註解⁴⁾」であるが、同じ時期に書かれた「資本と労働⁵⁾」は、ゴルロフ⁶⁾と言う当面の論敵を前にして書かれたものだけに、「ブルジョア経済学批判」の面

- 1) А. Л. Реуэль: Русская экономическая мысль 60-70-х годов XIX века и марксизм. М. Госполит. изд. 1956. стр. 83
В. Н. Замятнин: Н. Г. Чернышевский. (Н. Г. Чернышевский: Избранные экономические произведения. М. Госполитизд. 1948 Т. 1, стр. 5)
его же: Экономические взгляды Н. Г. Чернышевского. М. Госполит. изд. 1951.
Г. С. Васецкий и дру. (ред.) Очерки по истории философской и общественнополитической мысли народов СССР. М. АН СССР. 1956. Т. 2, стр. 51-67
- 2) См. В. Я. Зевин: Политические взгляды и политическая программа Н. Г. Чернышевского. М. Госполитизд. 1953
中村義知, 山内正樹: 19世紀ロシアにおける革命的民主主義の遺産をめぐる思想闘争「歴史評論」No. 71, 1955年12月 p. 34 以下参照
- 3) А. Л. Реуэль, В. Н. Замятнин: там же.
- 4) その一部は岩波文庫に収められているので、この著作については最早紹介の必要はないと思う。
- 5) 「Капитал и труд」1859年の終りに書かれ、Современник No. 1, 1860に掲載された。この論文の副題「Начала политической экономии соч. И. Горлова」(корректурь—ЦГЛА)の示す通り、これはゴルロフの著書への書評である。
- 6) Иван Яковлевич Горлов (1814—90), Казань及Петербург大学の経済学教授。著書「Теория финансов」(1841, 2 изд. 1845), 「Начала политической экономии」(2 тт., 1859—62)は、大体に於て、当時のツァーリ・ロシアの大学に於ける経済学の講義内容をあらわしていたと言い得るであろう。かれの第一の著をチエルヌイシェフスキーが読んだのは、1848年6月中旬、まだペテルブルグ大学歴史学科に在学中のことである。この時かれは「おそろしく愚昧な頭で粗雑に書かれた著書」と之を酷評している。(Н. М. Чернышевская: Летопись жизни и деятельности Н. Г. Чернышевского. М. 1953. стр. 29. Из его пол. соб. соч. т. 1, стр. 39.)
ゴルロフがソヴエト大百科辞典によつて「19世紀後半のロシアのブルジョア経済学者」と呼ばれているのは、主として農民改革時のかれの態度に基くものと思われる。すなわち、かれの目指したのは、農業問題のブルジョア＝地主的解決の道に外ならなかつた。改革時のゴルロフに就てチエルヌイシェフスキーは別の論文「Леность грубого простонародья」の中で、ゴルロフが「農民が農奴制の桎梏から解放されるのを最終的に否定しているもの」として攻撃している。

での論調は一段と鋭いものがある。ゴルロフによって経済学の教科書が出版されるや、チェルヌイシェフスキーは直ちにそれを、同時代のロシアに於て支配的であるかに見えた俗流経済学者たちの所説を批判する手懸りとして用いた。

かれは古典派経済学を科学的なものに見做し、俗流経済学とは明確に区別していたが、古典派経済学が俗流経済学に惰してしまったところにブルジョア経済学の弱い環のあることを見破った。

古典派経済学を俗流化した人たち、所謂俗流経済学者たちを端的に特徴づけるならば、それは労働価値説からの逸脱である。労働価値説は古典派経済学の主要な構成の基礎であるが、チェルヌイシェフスキーはここに資本主義批判の足場を見出している。価値の創造者としての労働の役割を強調し、労働と資本とを、また労働に基く所得と資本その他の所有に基く所得とを鋭く対比させている。

又かれは、古典派経済学の中から科学的な要素を選別し、それを基にして自己の目指す「勤労者のための経済学」の理論を構成しようとしたのである¹⁾。

二

チェルヌイシェフスキーの「経済学著作選集」(1948—1949)へのエス・ヴェ・バシスト(C. В. Басист) 助教授の註によると、「生産の要素としての資本と労働」²⁾のはじめの下書き草稿が残っていて、それは次の様になっている³⁾。

「資本と労働

(前述の部分からの一般的結論)

人間の働きかけなしに、自然そのものによってつくられた事物は、質量共に人間の必要を十分に満足させるに足るものではない。自然の諸力と諸対象を自分のはたらきによって人間の欲求を充たす諸対象や諸現象やの生産にふり向けるという人間にとっての必然性は、このことに基いている。この活動が労働と呼ばれる。」

チェルヌイシェフスキーは労働をこの様なものとして見ている。だがこれは、かれの意見によると、労働の客観的な面についてだけのことであって、労働には主観的な側面がある。すなわち、労働は脳髓と筋肉との有機体(オルガニズム)から成っている。別言すれば、労働は頭脳労働と筋肉労働とに分けられる。尤も、頭脳労働、或は筋肉労働という様に截然と区別することは不可能であって、単に筋肉だけ、或は頭脳だけによって行われる労働というものはあり得ない。従って存在するものは「頭脳—筋肉」労働である。労働は元来楽しいものであるが、時として労働することが不愉快なことがある⁴⁾。しかし、その

1) 鈴木純博氏は、主としてリカードとの関連に於て、チェルヌイシェフスキーが「社会主義的生産——勤労者のための経済学」を求めた過程を追跡し、且つ解明している。「チェルヌイシェフスキーとリカード」, 一橋論叢, Vol. 34, No. 3, 1950. 9.

2) 「Капитал и труд, как элементы производства」, 「Основания политической экономии Джона Стюарта Милля, т. 1, С. П. Б. 1860」の中で, J. S. Mill の Principles of Political Economy, with some of their applications to social Philosophy. 1848 の第1~第6章までの部分として書いたもの。この草稿はそのままこの章の構成の頭初の部分となっている。См. Н. Г. Чернышевский (以下単に Ч. とする): Избранные экономические произведения. 1948, (以下, 経済学選集とする。) т. 3. Ч. 1. стр. 213

3) Ч.: 経済学選集, т. 3. Ч. 1. стр. 470, 参照西沢訳 331 頁 註(22)

4) См. Ч.: О неприятности труда. 経済学選集 т. 3. Ч. 1. стр. 103 以下。

場合、労働それ自身が不愉快なのではなくて、労働の行われる環境が歪曲されていることのために、「その本性」に反して労働が行われるからである。現在の（チェルヌィシェフスキーと同時代の）西ヨーロッパ及びロシアに於ては、到る所に好ましからざる労働事情が支配的であるが、それは社会機構を改変することによって、労働が本来持っている楽しいものとしての本性をとり戻すことができるであろう。

労働の持つ精神的な面と肉体的な面とを総括して、労働に就いての概念を次の様に定義づけることができる。

「労働は脳髓と筋肉との活動であるが、その活動は、これら諸器官の持つて生まれた内面的な欲求を構成するものであり、しかもそれらの諸器官は活動そのものの裡に愉楽を見出す。またその外面的な結果としては、自然の諸力と諸事象とを人体の欲求に応ずる諸物や諸現象の生産にふりむけるものである。」¹⁾

労働についてのチェルヌィシェフスキーのこの叙述の中から、二つのことが言い得る。一つは、かれが人間と自然との間のやりとりとして労働をよく理解していることであり、もう一つは、勤労者にたいする労働の影響をかれが明確に意義づけていることである。

しかし、ザミヤトニン氏は、ここにチェルヌィシェフスキーの持つ空想主義的な要求のあることを指摘している²⁾。すなわち、チェルヌィシェフスキーによれば、労働はそれ自身よいものであり、人間に満足を与える。だが、現在の社会は勤労者をして労働が不愉快になる様な不自然な状態におかれている。勤労者が自然の状態、労働から喜びを得られる様な他の体制に資本主義を改変させようとする要求が、ここから出てくる。或は、かれの別の言葉によれば、過去に於て何時も労働が本来あるべき自然の状態にあったわけではない。有機体（オルガニズム）を正常な状態に維持するために、諸器官すべての筋肉にとって一定量のはたらきを必要とする。チェルヌィシェフスキーは、経済組織の未発達段階に於ては殆んどすべてののはたらきがこの必要を充たしていたと理解している。しかし、現在の分業と機械使用との社会体制、即ち資本主義の下では、労働者は一つの仕事の一つの部分の中にだけ止まっているので、労働は人体を不健康な方向に導いている。マルクスが「労働者の不具者への変質について」³⁾として語ったところのその現象に鋭い批判を加えつつも、チェルヌィシェフスキーは分業そのものによって、或は機械そのものの影響によって、この現象を説明することなく、労働者が仕事の一部の中に閉じこめられている社会体制、即ち資本主義体制によって説明しているのである。

たしかに、一度び新しい社会体制ができて、勤労者が自然の状態に立つならば、労働過程の人間に対する影響も根本的にかわり、人間の労働に対する態度もかわってくる。

チェルヌィシェフスキーが明らかにしている通り、大きなエネルギーが「……社会的施設の良否に比例して、また、勤労者の生産物部分の大きさに比例して（回転して）いる。」⁴⁾

「こうして国の生産物の豊饒を維持し増加するための主要な条件は、国の人口の勤労部分が労働のエネルギーを保持することにある。……」

この様にかれは、労働のエネルギーを大きく評価して、来るべき協同的社会制度の下に於ける労働の生産性は、あらゆる封建的なものを除去した新しい社会構成の下に於ては最

1) Ч. 経済学選集, т. 3. ч. 1. стр. 214. (西沢訳 122 頁)

2) Замечания: там же. стр. 339

3) 「資本論」第4篇 第13章 第6節, 青木文庫版長谷部訳, 第3分冊 710 頁

4) Ч.: 経済学選集, т. 3. ч. 1. стр. 219. (西沢訳 218 頁)

早それ以上には何物も希まない程のものになるだろうと言っている¹⁾。

チェルヌイシェフスキーはこの様に、資本主義社会の労働と社会主義社会の労働とを、何等の愉楽もなく、重苦しいものと悦びに満ちたものに対比しているが、この考え方の中にはフーリエからの影響のあることを認めないわけには行かないであろう²⁾。

ただここで両者の間の相違を挙げるならば、フーリエの場合は「人間の理性一般」に訴えているのであり、チェルヌイシェフスキーは社会的諸階級の対立を衝いているのである。そして、他人の労働によって生活している階級の利益によってとりきめられる様な社会秩序を、労働する者自身が拒否する時にだけ、人間は自然の、本来の姿にかえることができるであろうと言っている³⁾。

三

経済学が対象とする労働は如何なる労働であるか。チェルヌイシェフスキーによれば、経済学が問題とする労働は、人間の物質的欲望を充たすのに振向けられた労働であって、経済学で単に「労働」と言う場合には、専ら人間の物質的欲望の充足に向けられる労働部門と理解しなければならない。⁴⁾

たとえば、健康を保持するための労働とか、人間の権利を守るための労働とかは、それぞれ医学、法学の研究対象であって、経済学がこれを直接の研究対象とするものではない。経済学の研究対象としての労働の考察を進めるうちに、チェルヌイシェフスキーは労働を生産的なものと非生産的なものとに分けた。すなわち、「若し生産物が物質的な対象物、或はもっと正確に言うならば、相当長期間保存の利く対象物であるならば、労働は生産的と呼ばれ、若し労働がその発生と同時に消えてしまう様な刹那的現象だけを生むなら、その労働は非生産的と呼ばれる。⁵⁾

これが古典派の「生産的労働」に対するかれの理解である。かれは古典派による「生産的労働」の理解に満足できなかった。しかしわれわれは、チェルヌイシェフスキーによるこの定義の中から、生産的労働の歴史性にたいするかれの理解を引出すことはできない。⁶⁾ここでわれわれは一応、かれが経済学の範疇を不変なものと考えていた（この点ではかれは古典派の代弁者でもある）ことを想起する必要がある。かれは、スミスやリカルドの時代に、かれらによって打ち樹てられた定義が、かれの同時代に於ても不変絶対のものであると考えている。すなわち、科学的真理に排反するものは資本主義だけだとして、尚発展を続けている資本主義の歴史的現実を科学的に究明しようとしなかった。そして、飽く迄も古典派の定義に基礎をおきつつ、現実の資本主義体制に対する革命的な結論を引出そうとした。

チェルヌイシェフスキーが経済学に「極度に抽象的な性格を与えようとした」⁷⁾のは、

1) Ч.: 経済学選集 т. 2. стр. 366—368

2) Замятнин: там же, стр. 340

3) ミル「原理」第二篇分配、第三章「生産物の分配を得る諸階級」へのチェルヌイシェフスキーの註、(戸田正雄訳、春秋社版、第2巻65頁参照)。Ч.: там же, т. 3. ч. 2. стр. 101 以下。

4) Ч.: там же, т. 3. ч. 1. стр. 214. (西沢訳 122頁) 添点筆者

5) Там же, стр. 215 (西沢訳 215頁), ミル「原理」第一篇、第3章 1~4節参照

6) Замятнин: там же, стр. 341

7) ローゼンベルグ、ブルューミン、経済学史、広島、橋本訳、青木文庫版 550頁

フォイエルバッハの影響を強くうけていたことによって容易にうなづくことができるであろう。フォイエルバッハの考え方の基点は、生物学的存在としての人間である。チェルヌィシェフスキーはこの概念の中に、具体的な内容を盛り込もうとしたのである。かれは経済学の研究対象は「人間の幸福」を求める方法であるとしているが、かれの言う「人間」或は「人類」は、生産的に働く「勤労者」を指しているのである。そして、経済学はブルジョアジーの利益からでなく、「働く者」の利益から出発すべきであると主張している。かれは、勤労者の利益になるものだけを抽出し、逆にブルジョアジーの利益になるものを捨象することによって、経済学を「勤労者の利益」のためにつくりかえようとしたのである。¹⁾ これは同時に、かれの意見によれば、不合理な社会体制—資本主義制度の諸矛盾を暴露しようとする志向であった。

チェルヌィシェフスキーは、資本家の立場から見た生産的労働は結局社会にとっての生産的労働ではないと解釈している。

「その結果が人間の福祉に必要な生産物であるものを、われわれは生産的労働と呼ぶ。その結果が福祉を増大させないものを非生産的労働と呼ぶ。明らかに、ここでは誰の幸福が生産性の尺度になっているかということに大きな関連がある。窃盗は巧妙な盗人にとって極めて生産的なしごとであるが、しかし社会の福祉は窃盗によって増大されるものではない。それ故に、これは社会にとって非生産的である。……経済学が若し科学の名に於て主張するならば、全体の立場から事象を見て、社会の、国民の、人類の、又一方どんな部分的な、寄り合いでないものの利益をも考慮すべきは言うまでもない。それ故にわれわれは、社会の福祉を向上させる生産のみを生産的労働と呼ぶのである。……」²⁾

チェルヌィシェフスキーはここから資本主義批判の可能性を導き出している。かれは人間による人間の搾取を窃盗として取扱い、資本主義が人間の本来あるべき姿に如何に悖っているかを指摘している。若しそれが、社会にとってより有益なしごとから時間と力を奪うならば、その労働は非生産的なものとかれは考える。だから、気紛れや贅沢のために費消される各々の労働日は、もっと重要な必需品供給に充てられる生産物の生産にとっては全く無駄なものになる。ここからのかれの結論は、「……国民が、まだそのすべての構成員の第一の要求が十分充たされないうちに、贅沢品の生産のために自分の労働日の半分を使用するなどと言うことは、別な日に贅沢な食事をするために半数の日は飢えてしまう様な人、或は手袋のために収入の半分を使ってしまって冬になっても防寒被服もなしで凍えてしまう人と、同じ行動をしていることになるのである。」³⁾

資本主義社会の現実を見ると、この様な浪費が際限なく存在する。だからこそもっと合理的な制度に変革しようと、かれは主張するのである。

チェルヌィシェフスキーのこの様な考え方の中から、資本主義の下では生産的労働と呼ばれるものが、他の社会体制の下では必ずしも生産的労働たり得ないと言うこと、即ち、結局歴史的に見れば生産的労働が価値あるものであるという考え方が浮び上がってくるのではなかろうか。この点に、チェルヌィシェフスキーを単なる空想主義者として律し去ることの出来ないものがある。

1) かれのこの見解は、ロバートオーエンをはじめとする初期のイギリス社会主義者たちの経済的見解と相似たものである。ibid. p. 553

2) Ч.: 経済学選集 т. 2. стр. 348—349

3) Там же, стр. 351

ただ、チェルヌィシェフスキー自身は、経済学上の（古典派経済学からの）諸カテゴリーを絶対不変のものとしていたため、問題を最終的に解決することができず、労働の区分を生産的なものと非生産的なものとするところから、利益あるものと損になるものとの区分する様になって来ないわけには行かなかった。¹⁾ かれ自身が言っている様に、「社会にとって有利であるか損であるかと言う労働の分類は、労働を生産的なものと非生産的なものに分ける普通の区分とは一致しない」²⁾のである。

チェルヌィシェフスキーは或種の労働、例えば農耕其他最も主要な必需品の生産に向けられたすべての労働を、絶対的に有益なものとしている。また同じく、教化教育の労働をこの中に教えている。反面、或種の労働（かれはその一つの例の中に戦争を入れている）は、絶対的に不利益なものとしている。しかし、その時々々の社会の物質的な条件によって、有益なものともなり、有害なものともなると言う種類の労働が数多く存在する。例えば、非常に凝った羅紗の生産の様なものはこの類である。³⁾

現実の資本主義の下では、非常に多くの力が有害な労働のために費されている。だから、労働が行われる場合は、資本主義での社会的諸条件の下では、「好ましからざるもの」であるとチェルヌィシェフスキーは言うのである。⁴⁾ しかし、ここでかれの言う浪費は、或は社会体制に結びつき、或は生産物分配の方法論に結びつけて考えられている。ここに、かれの生産的労働に対する理解の歴史性に少なからぬ混乱のあるのを指摘することができるであろう。ただ、そのことによって、かれの資本主義批判の根強さに対する評価を毀損してはならないと思う。

四

つぎに「資本」についてのチェルヌィシェフスキーの所論を検討してみよう。

かれはブルム卿の言葉を引用して⁵⁾、経済学上の術語としての「資本」の意味が、いちぢるしく厳密さを欠いていることを繰返し述べている。かれの言葉によれば、この術語は一方では、「新しい生産のための手段の役目を果す労働の生産物」⁶⁾の意に用いられながら、同時に、貨幣其他の労働せずに生活することを可能にする価値を表わすのにも混用されている。しかしチェルヌィシェフスキーは、スミス、マルサス、リカルド、ミルと同じく、前者の意味だけを科学的なものとして採上げようとした。

ゲ・ヴェ・プレハーノフは、「かれはミルによる資本の定義を固持していた⁷⁾」として、これをチェルヌィシェフスキーに対する非難の言葉としているが、プレハーノフのこの批判が正しかったかどうか。われわれは単に、チェルヌィシェフスキーが如何に強烈にブルジョア経済学者たちの弁護主義を（ミル自身に対しても）批判したかを想起すれば足りる。

ところでチェルヌィシェフスキー自身も、実は「資本」についてのこの解釈を厳密に持ち続けることはできなかった。かれの場合、屢々「資本」は「資本家」と混同されており、

1) Ч.: 経済学選集 т. 3. ч. 1. стр. 95 (西沢訳 45~46 頁)

2) Там же, стр. 216

3) Там же, стр. 111~125.

4) Там же, стр. 221~226 (西沢訳 136~141 頁)

5) Там же, т. 3. ч. 1, стр. 193. (西沢訳, 96 頁)。その要点は、用語の意味を厳密に使用することを呼びかけたもの。

6) Там же, стр. 196. (西沢訳 100 頁)

7) Г. В. Плеханов: Н. Г. Чернышевский, соч. т. 6, стр. 113. (Замятнин により孫引)

「資本」に就ての叙述の中に、「労働者を掌握するために資本を提供している特別な種類の人」の記述が散見出来る。ミルに於ては、労働者を支える手段が、それによって働き手が支えられている生産物にではなくて、これらの生産物と交換することのできる貨幣にあると考えられているのである。

古典派の所論と、それを通俗化した人たちの所論とを混同するのは、結果として資本主義擁護の役割を果すことは、チェルヌィシエフスキーも気付かなかつたわけではない。たとえば、チュルゴーに就て書いた論文¹⁾の中であれば、チュルゴーが資本と資本家とを混同しているという指摘をしているのである。この論文の中では、チュルゴーが自らの裡にあるブルジョアの限界性のために、結局のところ資本主義を永久不変のものとしていることを知り、「資本」に就ての解釈の中から社会主義的な結論を抽出しようと苦悶している。「……若し資本家が過去の富であるならば、労働はその中から未来の富を引出すことが果してあり得ないだろうか？」²⁾

チェルヌィシエフスキーがひじょうな興味を持っていたのは、労働の生産物の二つの階級への分配の問題である。³⁾ 俗流経済学者たちは資本を、貨幣と物質的な物とからなり、それなくして労働は開花し得ないと言ひ、而も「生産された殆んどすべての富は資本家のためのものであり、勤労者階級のためには、貧しい生活を支えるに必要なだけがやっと与えられるのみである」と言う状態に何等眼を向けていない。そこでチェルヌィシエフスキーは、建物、機械、貨幣或は信用証券の形で存在する物質的資本の他に、それらよりも遙かに重要な倫理的資本が存在していると主張する。「最も重要な国民的資本は、国民の間に於ける倫理的な力と、知的な発展性との蓄積である。」⁴⁾ この倫理的資本の想定は、「革命的民主々義者たち」に特徴的なものである。

ここでもわれわれは、チェルヌィシエフスキーが資本の歴史性を没却していることを指摘せざるを得ない。さらにもう一つ、生産諸力と生産諸関係の混同をも指摘することができるであろう。

五

資本を「新しい生産のための手段の役目を果す労働の生産物」として定義づけたチェルヌィシエフスキーは、これらの生産物の主なる種類を列挙している⁵⁾。

- (1) 以前の食物ストックによってまかなわれる労働によって新しい食糧が得られる迄、生産時に労働者にとって必要な食糧
- (2) 労働者たちの住居
- (3) 衣服
- (4) 生産に必要な燃料
- (5) 生産材料
- (6) 用具。およびこれらの用具を収容したり、一般に生産を進めるために必要な建物

1) 「Тюрго». Ч.: 経済学選集 т. 1. стр. 644

2) Там же.

3) Ч.: Речь И. Бабста. Пол. соб. соч. т. 4. 1948. стр. 472

4) Там же.

5) Ч.: 経済学選集 т. 3. ч. 1. стр. 196~203 (西沢訳 100~108 頁)

(7) 交通路

(8) 自然力(一定の場所で、一定の力を成熟させるために、労働の生産物が必要な場合)

(9) 家畜

この様に資本の内容を明らかにした後かれは、生産に必要な時に於てのみこれらは「資本」であることを綿密にことわっている。

またチェルヌィシエフスキーは、労働者の消費財を「資本」の中に繰り入れているが、そこには「可変資本」の概念が萌芽的な形で含まれている。しかしかれ自身に於ては、資本の殆んどものは「不変」のカテゴリーの中にある。だがかれは、現実資本の大きさと就業労働者の数との間に有機的關係のあることを見出している。「生産的労働者の数は、これらの労働者たちに提供される食糧で給与され得る数を超えることはできない。生産的労働者たちに提供される食糧は、資本を構成している。かくて、生産的労働に従事する労働者の数は、資本の額によって規制される。」¹⁾

「資本」についてのチェルヌィシエフスキーの叙述の中で、この個所は少なからず異様の感に打たれる。かれは、リカルドがそうであった様に²⁾、固定資本と流動資本に就ての記述の中で、実は可変資本と不変資本に就ての記述をしていたのではないか。

ここでチェルヌィシエフスキーとリカルドとの間の共通点を見出そうとするならば、それは「機械使用の否定的影響」について共通の結論を出しているということである。「労働者階級の運命に対する機械の影響に関する問題は、生産の一つの操作によって消費され、再生産される流動資本と、生産操作の全過程に奉仕し、したがって、唯一回だけの操作によっては、若干のとりに足りない部分が再生産され得るだけの固定資本との資本区分に、実際的な重要性を与えている。」³⁾

この様に書いたチェルヌィシエフスキーは、固定資本及び流動資本の問題を、労働者階級に対する機械の影響についての問題に何故結びつけているかを説明する。「流動資本の主要部分は労働者の食糧から成っている。若し流動資本の一部が固定資本に変わると言うならば、これは労働者たちによって毎年消費され且つ再生産される食糧の数量が、かれらの消費から引去られてしまって、後では遙かに少い部分だけで再生産される様になるということの意味する。それ故に、労働者に害を与えることなしに固定資本となり得るのは、国の人口増加に対応するパーセンテージを加えて、従前の流動資本の完全な再生産のために除去された後に残る毎年の新たな余剰だけである。」⁴⁾ (ミルの第6章)

労働者の生存のための手段の再生産に投ぜられる資本部分よりも、生産手段の再生産に投ぜられる資本部分の急速な増大と結びついた蓄積に伴い、機械の導入によって労働者が駆逐されていくこと——チェルヌィシエフスキーがこのことを、かりに意識の上で感じとっていたにしても、科学的に整理して理解していたかどうか。この点、前者(リカルド)の轍を踏んでいたと言うより他ないであろう。かれの叙述は、この問題についてこれ以上発展することなく途切れている。

1) Ч.: 経済学選集, стр. 222. (西沢訳 137 頁)

2) D. Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation. 1821. 小泉訳 岩波文庫版 385 頁

3) Ч.: там же, стр. 224~225 (西沢訳 131 頁)

4) Там же.

チェルヌィシエフスキーは、資本の構成分析に筆を進める。

「通常資本家と呼ばれるのは、現在の経済秩序の下で、労働せずに、利子や取引上の利益による収入で、豊かに生活し得る程の金額を持っている人である。銀行家、金持の大商人、相当数の紙幣、或は何ブードもの金、或は何ブードもの銀を持っている人は資本家と呼ばれる。最も富裕な地主でも、所有地の外に大量の現金又は紙幣を持っていないならば、言葉の普通の意味では資本家とは呼ばれない。かれは自分の土地、又は土地から収入を得る権利の一部を売るか、貸すかによって、硬貨或は紙幣にかえて、全く容易に資本家となり得る。それをしない限り、かれはまだ単なる富裕者であって、資本家ではない。」¹⁾

かれは資本家が現在の社会体制——資本主義の下に於てのみ存在するものであると記述することを忘れてはいない。しかし、資本の概念に歴史性を加えて、これ以上追究することをしてはいない。

ここで一つ、チェルヌィシエフスキーによるミル批判を添加しておこう。チェルヌィシエフスキーは、労働は資本家にとって——単に生産の価値の要素にすぎないと言っている。しかしミルによる生産の価値に就ての叙述の中では、労働に就て全く没却されていることを指摘して、ミルの立場の資本家的性格を批判している²⁾。

さらに、当時フランスに於て繰展げられていた諸論争にふれている。「『資本』という言葉は、後れた学派と進んだ学派の間の激しい論争の対象になっている。後れた学派は資本を底抜けに讚美し、進んだ学派は呪詛している。だが、読者が容易にわかる様になるのは、厳正な科学に於て資本と呼ばれている生産の要素についてではなく、実は特定の社会的条件の下で演じている資本家たちの役割である。」³⁾

六

資本は労働の生産物である。この規定は、資本構成部分を列挙している個所をはじめ随所に見られるが、これは資本と労働に関するチェルヌィシエフスキーの叙述の中で最も重要な位置を占めていると考えられる。

資本家の下での労働の生産物の一部が、資本家の手に帰すべきだというミルの所説⁴⁾をばげしく非難して、かれは次の様に言っている。「……突然に、何故かはっきりしないが、生産物の一部が労働時の労働者に食糧を給与した人に、生産の労働に対してでもなく、この食糧保管の労働に対してでもなく、——いや、これには特別の報償が与えられる——そうではなくて、『個人的な消費の引延し』に対して与えられねばならぬ、と言う長々とした議論が現われてくる。だが、果してそれは労働なのか。いや、これは最早別の性質の現象、節制とか節約とかの現象であって、労働ではない。これは労働と同じ尺度で測ることのできないものである。」⁵⁾

かれは「富」の源泉は「労働」であると言う古典派の命題を正しいものと認めたが、労

1) Ч.: 経済学選集, стр. 191~129 (西沢訳 91~92 頁)

2) Там же, т. 3. ч. 2. стр. 254~255, 281

3) Там же, т. 3. ч. 1. стр. 191 (西沢訳 91)

4) ミル「原理」戸田訳, 第1巻 57~58 頁

5) Ч.: там же, т. 3. ч. 1, стр. 114~115 (西沢訳 79 頁)。チェルヌィシエフスキーのこのミル批判の項に、マルクスは“good”と添書している。Ч.: Изб. соч. вып. I, 1937, стр. 25, Пометки К. Маркса на книгах Чернышевского.

働の生産物をそれぞれに異なる三つの階層に分割して、地代、利潤及び賃金に分けることには賛成しなかった。¹⁾

この様なチェルヌィシエフスキーの資本主義批判の基礎は、リカルドの所説（労賃と利潤との対立）にあると言えるだろう。²⁾ すなわち、労働者の利益（賃金の上昇）が資本家の利益（利潤）の減少を来すということである。

自由雇傭労働の存在する時にのみ資本主義は存立する。個人的な自由を得て、「雇役労働者は消滅する。どんな人でも、他人に雇役されている人は、経済的奴隷の性格を持っている。」³⁾ チェルヌィシエフスキーの意見によれば、人間の売買と労働の売買との間には、何等質的な相異はなく、単に量的な相異があるだけだ。その相異の一つは、売買の行われる時間の長さであり、他の一つは、売買当事者間にある権力の度合いである。⁴⁾ しかし、かれはここでは、単に両者の間の本質的な類似点を指摘するに止め、労働搾取の形態としての奴隷制と資本制との間の質的な相異にまで言及してはいない。

「経済学者たちは、よろこんで、同じく奴隷制の経済的に不利なことについて議論し合っている。その際、それによって他人の欠陥を立証しているところの、かれらの並々ならぬ気位の高さには驚嘆させられる。かれらは奴隷制の基本的特徴について考えてみるがいい。」⁵⁾ それが、資本主義の下で再び繰返されていることを発見するであろう。「奴隷は自分の労働に対して、食物や住居などを受取るが、——それは生活を支えるに欠くべからざるものだけで、労働の生産物はかれのものとはならないのである。これが奴隷制の本質的な特徴である。」⁶⁾

フィジオクラート・チュルゲーを批判する中で、チェルヌィシエフスキーはこう書いている。「チュルゲーは、奴隷労働は生産性が少ない。何となれば、働き手は仕事がうまく行くことにそれ程の興味を持たないからである、とすぐれた指摘をしているが、名前だけ自由な、実際は貧窮の奴隷である労働者たちに話が進んだときには、この考えをすっかり忘れてしまっている。チュルゲーは、『自然発生性の支配体制』の苦しいことと、得になることとの明らかに不公平な不均衡には心をとどめない——かれは、この中に自然の秩序があると見ているのである。かれは事実を記載しておきながら、それについての考証を恐れているのだ。」⁷⁾

1) Cf. Ricardo: *ibid.* Chap. VI. On Profits. リカルドもスミスと同じく、商品の価値を利潤と労賃の二つに分ける誤りを犯している。これは、不変資本、可変資本及剰余価値の三部分に分けらるべきである。かれは価値論に於てはじめ、或貨物の価値は、或は換言してその貨物と交換される他の貨物の分量は、その生産に必要な労働の相対的の分量によって定まるのであって、その労働に対して支払われる報酬の大小によって定まるのではないとした。その後、商品の交換価値はその生産に費される労働の分量によって変動するだけでなく、労働の価値、即ち労働賃金の変動によってもまた幾分かは影響されるとした。この修正の主なる理由は、剰余価値生産を全く理解しなかったことによる。この様にかれが、価値法則を貫徹し得なかったのは、商品生産を一定の歴史的方法と考えることが出来ず、永久的、自然的なものとしていたからである。加藤誠一訳、研進社版 144 頁参照。См. Ч.: *経済学選集* т. 3. ч. 1. стр. 164~165

2) ローゼンベルグ、ブリューミン、*経済学史*、広島橋本訳、青木文庫版 552 頁

3) Ч.: *経済学選集* т. 3. ч. 2. стр. 216

4) Там же, стр. 282~283

5) Там же, т. 2. стр. 323

6) Там же.

7) Там же. т. 1. стр. 644

チェルヌィシェフスキーは、「労働の売買」の行われている社会制度と、「人間の売買」の行われている社会制度は、現実には殆んど全く変りないものだと言っている。この様な社会制度の下では、勤労者は自分自身のために働くということはない。労働するにしても、それを他人のための労働としてしか考えていないから、労働の生産性は非常に低いものとなってしまふ。

かれによれば、「労働の売買」は全く余計な取引である。何となれば、「労働の売渡しによって、相当数の余分な売渡しと購入とが生ずる。従って、これは無駄な消費である。」¹⁾だから、この様な無駄な、余計なものの存在する制度は悪いものであり、他の制度にとっにかえらるべきものである。チェルヌィシェフスキーのこの理解は、労働は生産物ではないから売買さるべきでなく、従って価値を持たないという論理であろう。

「実際に商品となっているものは少いが、愛情も商品となっているし、労働も商品となっている。……しかしその本性からして、これは売物ではない。もし、人間そのものが売物でないならば。」²⁾

ここにもかれの「資本」に対する非歴史的な理解がうかがえる。かれの場合、「資本」と「資本主義」との理解が混同している。「労働」が価値を持たないと言って、「労働力」が売買されていることに論及し得なかったところに、かれが空想主義的であると言われる一つの根拠が見出される。しかし言うまでもなく。われわれは、かれが「労働の売買」を「不自然なもの」として理解し、そこから、農奴制主義者のみならずブルジョア・地主的自由主義者への執拗な批判を押し進めたことの意義を抹殺しようとするものではない。

七

チェルヌィシェフスキーは分業問題と、生産性向上にとってのその意義について、多くのページを割いている。

かれによれば、「……分業は生産の増大と向上とにとって、一つの強力な条件である。」³⁾ スミスに於ては、分業は資本主義の下に於ける生産性向上の唯一の原因として語られている⁴⁾が、チェルヌィシェフスキーは専ら分業のブルジョア的形態を批判している⁵⁾。

資本主義の下では、生産過程の改良されるに従って労働者の労働はいよいよ同質、一面的なものとなり、高度の分業の下では、大多数の労働者のオルガニズムは停滞してしまふ。別言すれば、「高度の分業は、各勤労者が永久に仕事の同じ一部分にしがみついている様な現在の生産体制の下では、改良された生産諸過程の下にある勤労者の圧倒的多数のオルガニズムを損う。」⁶⁾ かくて、資本主義下の労働の諸条件は、機械の使用とともにひじ

1) Ч.: 経済学選集 т. 3. ч. 2. стр. 377

2) Там же, стр. 285

3) Там же, т. 2. стр. 311

4) スミスによれば、「労働の生産力に於ける最大の改善並に労働の方向または適用上に見られる熟練、技巧及び判断の大部分は、分業の結果生じたものと思われる」、A. Smith: An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. Book I, Chap. I, Of the Division of Labour. 大内兵衛訳岩波文庫版、第1分冊21頁以下。ここで E. Cannan 教授は「分業は労働の生産力改善の大原因である」という脚註を附している。

5) ここに、「資本論」第一篇第十二章の所説が、萌芽的な形で叙述されているのを見ることができる。

6) См. Ч.: там же, т. 3. ч. 1. стр. 263, 264

ようにきついものとなり、そこでの労働者の大多数は単なる機械的操作を行うのである。この様な状態のうちに、未熟練労働は熟練労働によってとって替えられるのであるが、その結果として、「現存する経済秩序の下での生産過程の改良は、労働者階級を経済的零落に導くことは避けられない。

現状擁護者たちは、この結論をひっくり返すために、英仏その他の先進国に於て最近の十年間に労働賃銀が低下するどころか、むしろ増大した（と、かれらは確信している）という数字を挙げている。しかしそれは全く無駄なことである。第一、かれらの採上げる数字は、まるで信頼の置けるものではない（別のところで詳述しよう）。第二に、若しその数字が信頼できるものだとしても、それらは何物をも証明していないではないか。¹⁾

先進的な生産手段はすべてこれ資本家の掌中において、労働者階級とは相反目する状態に在ることを強く意識していたチエルヌイシェフスキーは、現在の社会構成の下では、技術的進歩は労働者階級の福祉を低下するというかれの結論（経済的進歩の技術的側面からの）を、誰でも認めなければならないだろうと説いている。そして、技術的進歩に伴って出来た新しい社会的諸施設が庶民階級の福祉のために如何に多くの貢献をしたか、という現状擁護者たちの讃辞を冷笑するのである。この点われわれは、リカルドの機械論に於ける一つの結論、「労働階級が懐ける、機械の使用はかれらの利益を傷つけること屢々であるという意見は、誤謬に基くものではなくて、経済学の正しき原理に一致せるものである。」を想起せざるを得ない。チエルヌイシェフスキーの主張の典拠も、恐らくここにあったのであろう²⁾。

チエルヌイシェフスキーの言葉によると、「現存する社会秩序の下では、分業が労働者層の経済状態やオルガニズムそのものに与える有害な影響は、疑問の余地がない。この事は、その確かさに於て、数学上の定理に均しいものである。³⁾

又チエルヌイシェフスキーは、資本主義社会に於ける労働者階級の絶対的及び相対的貧困化を述べることによって、資本主義を批判している。資本主義の下では、「利潤は生産高よりも、より急速に増加する⁴⁾」と言って相対的貧困化を認め、「賃銀フォンドの絶対量もすでに減少しはじめている⁵⁾」と言って絶対的貧困化をみとめている⁶⁾。

競争の結果、資本の集積と集中とが行われるということからかれは、資本の蓄積の行われる一方、他方では労働者階級の窮乏化が進んで行くことを指摘している。「結局、農業及び工場制工業は、各人の無限の競争の下にある。生産の規模が大きければ大きいほど生産費が安くなるから、大資本家たちは小資本家たちを圧倒する。小資本家たちは、雇傭者たちの列に移行しつつ、段々にその地位を譲り渡してしまうのである。だが、雇傭労働者間の競争によって、賃銀はさらに一そう低下する。かくの如くしてイギリス及びフランス

1) Ч.: 経済学選集, Т. 3. Ч. 1, стр. 263, 264.

2) リカルドはこの論旨を、マカロックへの手紙(1821年6月21日)の中で「一さいの幾何学上の定理と同様に信頼出来るものと思われる」と補足している。「リカルドのマカロックへの手紙」中野正訳, 岩波文庫版 p. 108, 188, 223 及編纂者の序文(p. 316)

3) Ч.: там же, стр. 266 (西沢訳 148頁)

4) Ч.: там же, т. 3., ч. 2, стр. 232

5) Там же.

6) 西沢富夫: チエルヌイシェフスキー「J. S. ミル経済学原理」への評解, 解説, 岩波文庫版 346頁。

に於ては、一方に数千の富者が、他方に数百万の貧者が生まれた。避くべからざる無限の競争の法則によって、前者の富はいよいよ増大し、いよいよ小數の手中に集中する筈のものである。一方、貧者たちの状態は、いよいよ深刻なものにならざるを得ない。』¹⁾

分業が資本主義の下で労働者階級に与える有害な影響をチェルヌィシエフスキーは繰返し強調しているが、それは資本主義という経済制度の所為であって、分業そのものは元来進歩的な現象として認めているのである。すなわち、人間の福祉の向上のために分業が不可欠であるということに、かれは何の疑いも持っていないし、分業は容易に労働者の健康と物質的条件の改善の因となるものであるとしている。ここから引出される二つのことがらを一緒にすると、人間の福祉の向上にとって不可欠の分業が、それを押し進めることによって労働生産性が向上し、勤労者²⁾たちの状態を悪化し、勤労者たちに致命的な影響を与える、というナンセンスな結論が出される。ところが、かれの言葉によれば、おくれた学派の経済学者たちは、例外なくこの袋小路に追い込まれている。たとえばマルサスは、苦難は大衆の避け難い運命であると言いつけているのである。それでは、分業の不可避性の問題をどの様に理解すべきなのか³⁾。問題は、分業それ自体にあるのではなくて、それによって生産が遂行されているところの生産手段にある。さらに、生産の物質的構造にでもなく、その技術的側面にでもなく、それに従って生産が行われている経済的諸関係に於てだけある⁴⁾。

ミルは農耕過程の種々の作業の循環性によって、農業労働における仕事の分化を説明している。仕事が循環することは、ミルの見解によれば、農業の大きな特典となっている。ミルはこのことを簡単に扱っているが、チェルヌィシエフスキーはそこに、小農の独立性がおびやかされていることを指摘している。かれの記述によると、農民たちは工業の仕事に時間の一部を割くし、又工業労働者たちは必要な時に農耕を援けることが出来る。そのような協業は、生産性の向上を援ける強力な根柢であった。しかし資本主義の持つ諸条件は、工場主たちをして、労働者たちに一年間を通じて同一作業に従事させること余儀なくさせている。かくて、農民たちは、工業製品の家内生産に自分の余暇を割くことも出来ず、又家内生産の仕事の絶対量が減少することは農民にとっても社会によっても、つぐない得ない大きな損失と危険とをもっている⁵⁾。

- 1) Ч.: Славянофилы и вопрос об общине. Опыт изложения главнейших условий успешного сельского хозяйства. 経済学選集 т. 1. стр. 105. 資本主義下の労働者階級の貧困化についてのチェルヌィシエフスキーのこの明確な特徴づけを、マルクス以前の文献の中から見出そうとするならば、エンゲルスの「経済学批判大綱」(Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie. 1844) にのみそれを求められるであろう。
- 2) チェルヌィシエフスキーの叙述の中で「労働者」と「勤労者」とは屢々混用されている。又「価値」も ценность と стоимость が混用されているが、この様な用語の不統一は、ひとりチェルヌィシエフスキーに限らず、まだ経済学の未熟であったこの時代のロシアに於ては一般的なことだったのである。
- 3) この点に就てヘッカーは「チェルヌィシエフスキーは、この矛盾撞着を解決する唯一の方法は、ロシアのミール制度にありとした。」としているが、分業の問題というよりも、資本主義の問題として取扱うべきである。cf. Julius F. Hecker: Russian Sociology. N.Y. 1915. pp. 83~84, (波多野鼎訳, 聚英閣版 73~74 頁), cf. M. Grigoryan: N. G. Chernyshevsky's world outlook. M. 1954. p. 59.
- 4) Ч.: 経済学選集 т. 3. ч. 1. стр. 266~270 (西沢訳 148~153 頁)
- 5) ミル「原理」第I篇, 第8章(とくにその第6節), 第5章, 第1節の終りにつけられたミルの註を補足するチェルヌィシエフスキーの註, 西沢訳 133 頁参照

同一の勤労者が、与えられた仕事から他のものへと交替することは、分業の欠陥によって起る不利益をとり除くにちがいない。又、仕事の分化もいろいろの利益を与えるであろう。同一の人にいろいろの種類の仕事が組合わされることは、一面では労働操作の安易化、改善及び専門化へと導き、他面では労働者の健康を増進し、その智力の向上にも役立つ。チェルヌィシエフスキーが有益なものとして理解しているところのこれらのものは、「勤労者の智的発達に不都合な状態」、即ち資本主義的生産方法の諸条件によって妨げられている。

「一定の時間に、一定の場所で、どこまで仕事の分化が行われ得るかという段階は、生産された諸商品の販売市場の大きさによって決められる。これは完全な真理である。しかし、付け加えなければならぬのは、一定の水準の仕事の分化にとって必要な市場の大きさは、色々の生産方式の下で異なる、ということである。」¹⁾

引用した言葉から解る様に、チェルヌィシエフスキーはスミスと同様、分業一般について述べているのであって、社会的分業と経営内部の手工業的生産に於ける分業、即ちマニファクチャータ的分業とに就て述べているのではないが、かれは消費及び購買力相応の需要は種々の生産方法の下で異っていることを示している。窮乏化を随伴する資本主義は、分業と労働の結合とを別々のものとし、さらに、仕事の多様性は、病弱な労働者を健康にしたり、愚鈍なものを明敏にしたり、又同一の労働者が各種の操作を順次に行うことによって達し得る水準よりも遙かに高い程度にまで生産過程を改善することを不可能にしている²⁾。

チェルヌィシエフスキーのこれらの記述をしぼってみると、当時ロシアに於ても既に大きな地歩を築いていた資本主義は、一言で言えば、「社会にとって利益がないばかりか、有害である」。ここでは、まっとうからの対立の中で、単に「そこから利益」が得られるということだけで事業が行われ得る。例えば農業に於て、穀物の集荷が少いほど穀価は高くなり、経営主は多くの収益を得ることが出来る。逆に、集荷が多ければ価格が低落し、損害を受ける可能性が増大する。その様なことは、労働の不成功に対する直接的な報償であり、成功に対する罰金である。又人をして、社会状態の悪化することに緊張し、改善することへの意欲を減ぜしめることである³⁾。

チェルヌィシエフスキーは、当時支配的であった経済理論は競争の支配権、即ち本質的には他の生産者をつき落とすために各生産者が張切る様にとアジっているとして、この様なブルジョア経済理論を批判している⁴⁾。

八

チェルヌィシエフスキーは労働を人間生活の自然の在り方の中に把握し、人間による人間の搾取を伴う社会体制、当面する資本主義体制によって、労働が人間の本来の自然の状態から如何に歪曲されているかを繰返し指摘した。

かれが非常な注意を傾けた分業の問題では、分業それ自体は、来るべき理想的な社会体制の下に於て、人間の福祉の増大のためにも、人間の要求する方向への労働の質的变化の

1) Ч.: 経済学選集, т. 3. ч. 1, стр. 275. (西沢訳 156)

2) Там же, стр. 226

3) Там же, т. 3. ч. 2. стр. 115

4) Там же, т. 2. стр. 339

ためにも、大きな役割を果たすものだとしている。そして、分業が勤労者の状態を悪くし、搾取を強化する機能を持っているのは、現実の資本主義制度という条件の所為だとしている。

当時まだマルクスの経済学を知らなかったチェルヌィシエフスキーは¹⁾、資本家階級とその支配する社会体制との歴史性に就て考証を進めたが、資本そのものの歴史性について十分な理解をしていなかった。かれの考え方を育んだ二つの源泉は、ドイツの古典哲学、イギリスの古典派経済学及びフランスの社会主義であった²⁾。しかし、何故かれがフォイエルバッハの唯物論を史的唯物論に進め得なかったか、また「プロレタリアート」を認識せず、その見地での資本主義的生産方法の発展法則を明らかにし得なかったか、かれと同時代の「革命的民主主義者たち」と同じく、かれもまたさまざまな空想が失敗に帰した1848年の経験を考慮に入れていた筈である。

われわれはここで、当時のかれをとりまく現実的な課題、——まだ「資本主義的諸関係は、恰もそれが外部から持込まれたかの如く、また、それは国の国内的発展の結果ではなく、ツァーリ政府の政策によっておしつけられたかの如く思えるような条件」³⁾の下での、半世紀に渉る前代未聞の苦悩と探究のかたまりを考慮に入れなければならないであろう。

かれは言っている。おくれたロシア、そこではまだやっと「人民の幸福についての問題を理解するために、我国では全く忘れ去られてきた学問《経済学》に訴えた」⁴⁾ばかりであった。そうしてかれに解ったことは、大学教育を通じて、或は外国文献の研究を通じて、経済学が少なからぬ人々に紹介はされていたということである。労働の解放（自由雇傭による）、土地所有の様式、独占等々の問題の解明を求める世論に押されて、これらの専門雑誌も発行されていたし、又経済思想についての専門雑誌も発行されていた。しかしながら、「そういった傾向や要望によって、国民経済の諸原則を述べた書籍の出現を立証するのは無益なことであろう。」⁵⁾

その様ななかでかれの模索した経済学は、資本主義の疾病を抜き、資本主義下の勤労者階級の貧窮化の不可避性を指摘して、強力な資本主義批判を行い、資本主義批判者としてマルクスの最も近い先行者となっている⁶⁾。

- 1) チェルヌィシエフスキーは後に Вилюйск の流刑地で「資本論」を知り、その討論もしている。Н. М. Чернышевская: Там же, стр. 366, 397 (Переписка К. Маркса и ф. Энгельса с русскими политическими деятелями. 1951 より)
- 2) ローゼンベルグは、それを「ロシアの後進性」という一語で割り切っている。ローゼンベルグ, ブルユームン。ibid. p. 552
- 3) ibid. p. 542
- 4) Ч.: 経済選集 т. 2. стр. 302
- 5) Там же.
- 6) Замятнин. там же, стр. 337

附記、本稿は文部省科学研究費によるものである。なお、草稿を閲読して幾多の御教示を頂いた飯田教授に深く感謝する。

Chernyshevskii's View of "Capital" and "Labour"

Satoshi Yamamoto

What was the attitude assumed by N. G. Chernyshevskii (1828—1889) towards the doctrines, especially that of "capital" and "labour", of the classical economics of Western Europe? The author aims at elucidating this problem in the light of two important historical factors, i. e. the delayed development of economics as one of modern sciences in Russia, and the immaturity of Russian capitalism at the time of Chernyshevskii.

Chernyshevskii's analysis of "capital" is closely combined with that of "labour", and at the same time it includes a criticism of "capitalism" and "bourgeois economics". Only on the basis of this criticism, the author believes, can Chernyshevskii's "revolutionary democratism" and "utopian socialism" be rightly judged, and it may be wrong to put the question whether Chernyshevskii's view afforded a theoretical foundation for the populism ("Narodnichestvo") of the later period, or it was a type of democratism essentially different from the latter. In other words, the author cannot agree with some critics who are inclined to classify Chernyshevskii's theories simply as progressive or retrogressive, taking them up separately.

In the degeneration of "classical economics", which he had regarded as scientific, to the "vulgarized economics", Chernyshevskii saw the weak point of "bourgeois economics". He sharply criticized the deviation of this school from the theory of labour value. This attitude seems to be the key toward understanding the real character of the economic theory he had in view.

However, his conception of "capitalism" could hardly be termed a strictly scientific one. Through an analysis of "labour", he attained a new viewpoint, from which he severely criticized capitalism, judging its merits and demerits. But because he, like other Russian economists up to his time, could not always view the development of Russian capitalism in its proper historical perspective, his "Economics for Labour" contained contradictions of the kind above suggested.

Such is the author's conclusion about Chernyshevskii's view of "capital" and "labour", drawn from an examination of his works, especially his "Comments on Mill's Principles of Political Economy", "Outlines of Political Economy According to Mill" as well as "Capital and Labour".